贅沢な恋愛

林　真理子
北方謙三
藤堂志津子
村上　龍
森　瑤子
山川健一
山田詠美
村松友視

角川書店

贅沢な恋愛

林　真理子
北方謙三
藤堂志津子
村上　龍
森　瑤子
山川健一
山田詠美
村松友視

角川書店

贅沢な恋愛

一九九〇年九月六日初版発行
一九九一年一月二十日八版発行

著者　村上龍・林真理子・北方謙三・藤堂志津子
山川健一・森瑤子・村松友視・山田詠美

発行者　角川春樹

印刷所　暁印刷株式会社

製本所　株式会社宮田製本所

発行所　株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二―十三―三
電話　営業部〇三―三八一七―八五二一
編集部〇三―三八一七―八四五一
振替口座　東京三―一九五二〇八　〒一〇二

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan
ISBN 4-04-872595-5 C0093

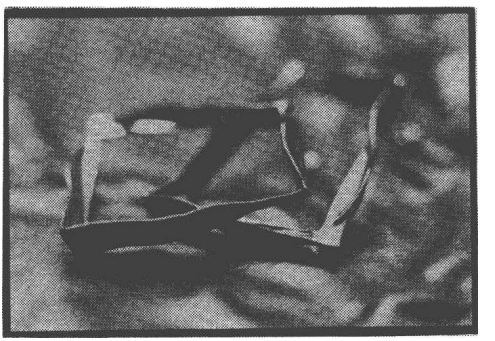
贅沢（ぜいたく）な恋愛 ＋ 目次

ムーン・リバー　村上　龍　5
真珠の理由　林　真理子　29
彼女の時　北方謙三　57
空からの手紙　藤堂志津子　87

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

スピカと月　山川健一　117
扇のブローチ　森　瑤子　149
夢のいろどり　村松友視　177
雨の化石　山田詠美　205

ムーン・リバー



村上龍

僕は自分のことをボーイと呼ぶことが多い。

名前はあるがあまり使わない。名前を呼ぶような付き合いを持っていないせいだ。両親は特別な病気で入院している。恥ずかしい病気らしい。その二人の子供だということで僕もいつも変な目で見られるし、学校では苛められたり、知らない人から殴られたこともある。それで学校にもほとんど行かなくなった。健康だけではなく、その他にもいろいろ失ってしまった両親だが、貿易の仕事をやっていて、お金は使いきれないほどたくさんあった。この二年くらいは父も母も病気が進行してしまって会うこともないが、まだ彼らのからだに赤紫の斑点ができる前に、僕の将来について話した。

お前は苛められるだろう、と父は言った。

でもお前はパパとママが病気になる前に生まれてきた子供だからパパ達のようになることはない、でも世の中はそうは見ない、それにパパとママはもう元のように元気

になることはできない、ゆっくり死んでいくだけだ、だからお前はまだ十三歳だが、一人で生きていかなくてはならない、おじいちゃんとかおばあちゃんとかおばさんとかおじさんとかそういう人が一人でもいればよかったんだが、残念ながら一人もいない、パパは、別にこういう病気になったから言うわけじゃないけど、お前は世の中と仲良くする必要はない、お前は幸運なことに頭もいいしコンピュータのオペレーションではもう既にパパよりも上手だ、それとお金は心配しなくてもいい、自由に使えるようにしてある、香港とスイスの銀行とのデータ通信のやり方も知ってるだろう、学校へも行く必要はない、それより自分が学びたいと思ったことを勉強しなさい、それと新しい機種のマニュアルを読んで他の子供よりは上手だけど英語をもっと勉強して、英語だけは読んだり書いたり話したり聞いたりできるようにしておきなさい、一人で生きていくのはとても大変だろうけど、うまくやれたら素晴らしいものになるよ……

僕は一人で生き始めた。まず食事の仕度とかそういうことだけど、それは家政婦が来てくれるので問題はない。学校は一番面倒だったが父の知り合いの私立中学に籍だけを置いてもらい、イギリス人の教師に興味がある教科だけを習っている。第一には

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

情報科学で、そこには当然数学とそれに少し物理も含まれる。それに基本的に授業は英語でやるから語学力もつくというわけだ。

家政婦は年寄りで一と月おきに変えるから話相手にはならない。友達もいない。それは僕が友達を無理に作ろうとしていないからだし、同じ年頃の人とは話も合わない。イギリス人の教師は、いずれ良い友人ができるだろう、と言ってくれる。しかし、コンピュータ通信で知り合ったアメリカのロスアンゼルスの宗教家が言っていたように、人というのは自分だけで自分を確認することはできないようだ。自分を確認、なんてちょっと十三歳には難しい言いまわしだが、経験でわかった。土曜と日曜、イギリス人は来ない。家政婦は確かに人間で生物だから動いたり呼吸したりするけれど僕に言わせるとコンピュータよりはるかに不正確で情報のビット数も少ない、石とか煉瓦(れんが)とかタイルとかそういうものとあまり変わらない存在だ。だからまったく信号や情報の交換がない。土曜、日曜と、コンピュータ以外とは話さないでいると、脳がどこかわけのわからない場所をさまよっているような不安定な感じになってしまう。コンピュータ通信では会話ができるが、きっと距離感の問題だと思うのだが、脳がさまようの

をつなぎとめることはできない。結局イギリス人と授業以外にいろいろな話をして自分を回復するしかないことになる。

「きのうは、何を食べたの？」

「海草のサラダと、魚だったよ」

「お手伝いの人は料理が上手なのかい？」

「うん、それは条件の中に入ってるからね」

「牛乳、飲んでる？」

「ああ、言われたから飲んでるよ」

「ボクが言ったメーカーのものしか飲んじゃだめだよ」

「わかってるよ」

そういう話をするうちに、漂っていた脳が僕の頭、からだに戻ってくる。そういうことが自分を確認することだとわかった。そして、確認の方法は、もう一つあった。それが、自分を、ボーイと呼ぶことだったのだ。例えば、一人でずっと部屋にいて、キーを叩き、モニターを見るのに飽きた時なんか、自分で、声に出して呟くのだ。

ボーイは退屈していた……

だけどボーイは寂しくはなかった……

ボーイは音楽が聞きたくなってタンジェリン・ドリームを三曲聞いたのだった……

そう自分で呟くと、脳はやはりからだから出て行くが、さまよったりはしない。一定のところ、僕の頭の右斜め上、あたりにぴったりと停まって、ちょうど対潜用のエコー・センサーのように神経をピンと張ってあたりをうかがっている。その状態は悪くない。そして最後に、

ボーイとは僕のことなのだった、

と呟くと、エコー・センサーの脳はぴたりとからだの中に戻ってくる。そういう時、右斜め上に浮遊しているのが「ボーイ」なのか、地上にとどまっているのが「ボーイ」なのか、僕はどっちなのか、わからなくなる時があって、自分をボーイと呼ぶ方法は一種危険をはらんでいるなと思ったりもしたが、一人で生きていくというのは危険の連続だとうんと昔幼児の頃読んだ本に書いてあったので他にチョイスはなかった。

一年ぐらい経って、イギリス人の教師が急に退屈になった。彼は僕の両親のような

病気に対して偏見を持たない進歩的な考えの人だったが、僕がもうすぐ十五歳になろうとする頃に原子力とか密林からの酸素がどうのこうのというようなことを顔を赤くして言うようになった。そういう話を聞くのが苦痛になって、それでも代わりの家庭教師を捜すのは大変な手間が要りそうだったから我慢していた。我慢することは精神に負担をかける。その負担は、ボーイ・ゲーム、で解消する他はなくて、ボーイと僕はますます距離を増し、呼び戻すためにはかなりの努力を要するようになった。

そして、進歩派のイギリス人がマレーシアの密林の開発を止めないと世界で最も美しい猛獣である虎も絶滅するし酸性雨が降ることにもなると二時間以上もレクチャーして頭が痛くなった僕が「悪いけどもう帰ってくれ」と彼に言って、一人になり、「ボーイは……」と呟くと、ボーイだけが絨毯の上に立っていて、僕はどこにも見えなかった。それは奇妙な感覚だったが、ものごとを把握できなくなったわけではない。ボーイが立っている絨毯は病気になる前のママがお仕事で北京と上海に行った時に買ってきたものだ、ボーイはその上でこれからどうすればよいのか迷っている、ボーイは僕とまったく同じ格好をしているが自分で行動できるようにはプログラミングされ

ていないので、僕が指示してやらなくてはならない……みたいなことはいつも同じなのだが、「僕」がどこにもいない、叫びたくなるくらい恐くなったが、「恐怖に捉われたら考え込まないでジョギングみたいなことでもいいからからだを動かすんだ」といつかパパが教えてくれたので、僕は、ドアを開けて外に出ることにした。しかし、「僕」はどこにも存在していないので出口に向かいドアを開けて外に出たのは、ボーイだった。

外は、異様だった。お月様がオレンジ色に膨れ上がって、マシュマロマンとキングギドラが決闘していた、というようなコミカルな異様さではなかった。街灯はいつものように輝いて通る人の影を長く道路に伸ばしていたし、普段と変わらないカラリングのタクシーの窓の片隅には、

空　車

という赤いライトの字があった。異様だったのは、空気の質感のようなものだ。「僕」はよく憶えているが、まだママが元気な頃の冬の日、外に遊びに出ようとすると、ママが「寒いからセーターを着るのよ」と言ってくれて、ドアを開けた瞬間、冷

たい風が僕のからだの輪郭をくっきりと際立たせてくれた。春が少し曖昧だが、冬にも秋にも夏にもそういう温度や湿度を含んだ空気の質感があるものだ。だが、ボーイが初めて一人で外に出たその夜は、まるで空気がサワークリームになったみたいだった。ドロンとしていて質感がない。マンションの部屋から扉を開けて外に出たはずなのに、どこか別のもっと巨大な部屋に入り込んだような感じだった。「ボーイ」が一人歩きを始めたからだろう、と僕は思った。ボーイは階段を降りて、舗道に立った。

「なまぬるい夜だな」とボーイは呟いた。そうボーイが呟いた瞬間に、「僕」は完全に消滅した。

ボーイは、この街を突破しなければいけないと思っていた。この街は実によそよそしい。何かわけのわからないものに支配されているに違いない。ボーイはタクシーに乗った。

「どこまで行きますか?」

と運転手が聞いてきた。運転手はまだ事の重大さに気付いてはいない。

「とにかく街を突破しなければならないんだ、できると思うかい?」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.c